2023年6月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第557号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

活字文化の〈地産地消〉

現代版「郷土保護運動」としてのＵＢＥ出版

文・堀 雅昭（UBE出版代表）

本州の最西端で本を書き、気が付けば60歳である。

2001年に福岡の葦書房から出た『戦争歌が映す近代』が処女作なので、もう20年以上になろうか。そのタイミングでUBE出版を立ち上げた。

マスコミ風にいえば、「地方の作家」が還暦になって、物好きにも個人出版社を地元ではじめたという構図である。

ここに雑文を書くのも、新刊の『エヴァンゲリオンの聖地と３人の表現者』を首都圏の書店でも扱って欲しいと、地方・小出版流通センターの川上賢一社長にお願いして、受け入れて戴けた結果だ。宣伝力のない個人出版社に、広報誌に何か書いて宣伝しないかとの助け舟に、図々しく筆を進めている。

大学を出て九州でサラリーマンをしていた私が文章書きになったのは、若いころからの文筆趣味が高じ、あちこちの文芸賞に応募するうちに、葦書房の編集者であった小野静男さんと出会ったことにある。

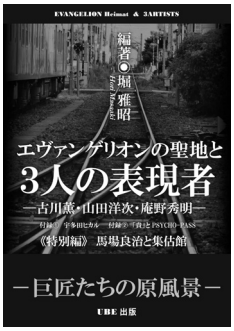
直接のきっかけは、長崎の小さな文学団体から新人賞を貰ったときだ。

新聞等で紹介されて気を良くした私は、本を出したい欲求にかられ、新作稿を一気に仕上げると、そのときも図々しく福岡の葦書房に送り付けていた。

すでに郷里の山口県に戻っていたが、もちろん採用されない。

ただ、内容の一部を膨らませて一冊にまとまるなら出版を考えてもよいと、当時の三原浩良社長（故人）から言われた。このとき付いてくれた同世代の編集者が、現在、弦書房の代表である前出の小野静男さんだったのだ。

「頑張って完成させましょう」



『エヴァンゲリオンの聖地と３人の表現者』ＵＢＥ出版刊／ISBN978-4-910845-01-2

小野さんの励ましで何度も書き直し、ようやくできた作品が、軍歌ばかりを論じた前掲の『戦争歌が映す近代』だったわけだ。

幸いにも日本図書館協会選定図書になり、2800円（本体）もするハードカバー本ながら書評も多く出て、それなりに売れた。

ところが直後に小野さんが葦書房から独立し、弦書房を立ち上げることになったのだ。

小野さんも、いろいろ苦労されていた時期である。

結局、その後も小野さんのところで書いて、『杉山茂丸伝』（2006年刊）を最初に出して戴いた。以来、20冊ほど書いた作品の半数以上が弦書房の作品となっている。

気がつくと井上馨、鮎川義介、寺内正毅など、長州主体の人物評伝ばかりになっていた。

むろん、出版からこぼれた水子原稿にも心を動かされるようになる。

山口県には大型書店もなく、出版社といっても古書を復刻するマツノ書店くらいしかなかった。明治維新史の好材料を持ちながら、作品をアウトプットできる仕組みも、市場もなかったのだ。福岡の弦書房で作品を発表しながら、自前の出版社を作りたいと思い始めたのは、こうした足元の言論不在の閉塞感がある。

とはいえ、自力で出版社を立ち上げる力量はない。

地元では異色の自由民権家・中川令辰の評伝を、明治維新150年を迎えた2018年に山口市に協力してもらって出版したのと、地方新聞に連載した歴史評伝や郷土本を何冊かをまとめたくらいか。

転機は2021年に、私が住む宇部市が市制施行100年を迎えるときに訪れた。

市役所が民間とコラボで祝賀事業を募集したのだ。

これを逃す手はないと思い、弦書房とタッグを組んで応募し、宇部市制100周年出版企画実行委員会を組織した。

国の重要文化財になっている渡邊翁記念会館が、なにゆえ日中戦争期に音楽堂（オーディトリウム）として、水洗トイレ完備の豪華施設で登場したかを考察する作品を編むのである。

設計者は、後に、この建築で有名になる村野藤吾であった。

また、村野を起用したのが、戦時下に石炭産業から宇部興産㈱（現、ＵＢＥ㈱）を創立した俵田明であった。

俵田はどこにでもいる地方実業家の

竣工当時の姿を残す渡邊翁記念会館（国の重要文化財）

一人に見えようが、実は文化好きでユニークな技術系経営者だった。

渡邊翁記念会館を完成させた俵田が立ち上げた宇部興産は、米国と戦うために作られたような会社である。

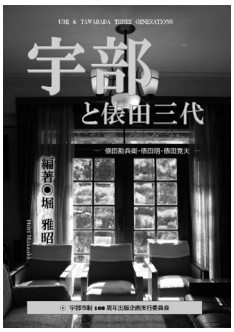
戦間期の２人の足跡と精神史を、建築史や工業技術などと絡めながら、世界史的枠組みの中でとらえ直す作品の出版を以前から弦書房に提案していたが、実現できないままになっていたのだ。

こうして市制施行100年の節目に世に出せた『村野藤吾と俵田明』が、第34回和辻哲郎文化賞の最終選考（一般部門109点中のうち上位５点）まで残ったので、それなりの達成感はあった。だが、ここでも書きこぼしが出ていた。

『村野藤吾と俵田明』（表紙と裏表紙）弦書房刊／ISBN978-4-86329-228-4

自前のＵＢＥ出版を立ち上げたのが、この時だったわけだ。

新たな水子供養としてビジュアル版の『宇部と俵田三代』を2022年に発行するため、広告を募集し、販売とは別に郷土学習資料として県内各市町の図書館や、地域の小中学校、高校、大学に寄贈した。



『宇部と俵田三代』ＵＢＥ出版刊／ISBN978-4-910845-00-5

UBE出版は、宇部市制100周年出版企画実行委員会の出版部門を独立させた版元といえよう。

一方で、よく言われるように山口県の保守性は、明治維新にまでさかのぼる。

細い道路まで徹底的に舗装されている状況など、高水準すぎる社会インフラが、時には嘲笑的にも語られてきた。

にもかかわらず、活字文化は井上馨の肝いりで吉富簡一が創刊した『防長新聞』の廃刊後は県紙もない閉塞が続いていたのだ。行政とタッグを組んで、出版事業を提案したのは、保守的な土地が本来有していた言論と活字文化を回復するためでもある。

とはいえ出版となると、原稿を書けば終わりではない。

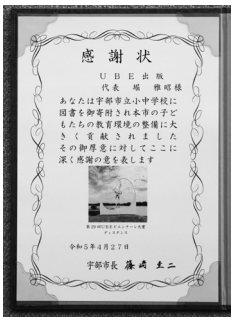
製作費を賄う広告集めも大変で、流行りのクラウドファンディングも考えたが、結局、地元の会社を一社一社歩き回り、頭を下げて広告出稿をお願いした。

そんな苦労の末の第２弾として、今回『エヴァンゲリオンの聖地と３人の表現者』が出版できたわけだ。

本書は古川薫（直木賞作家）、山田洋次（映画監督）、庵野秀明（アニメ興行師）ら著名な表現者と作品の原点を、彼らの生活した地方から逆照射するビジュアル版のノンフィクション作品である。

深堀りした取材で、地域史と絡めたユニークな評伝に仕上がった。

巨匠たちのレア情報をこれほど潜り込ませた作品は、後にも先にもできないだろう。


感謝状

ＵＢＥ出版
代表　堀　雅昭様

あなたは宇部市立小中学校に図書を御寄附され本市の子どもたちの教育環境の整備に大きく貢献されましたその御厚意に対してここに深く感謝の意を表します

令和５年４月２７日

宇部市長　藤岡　真二

宇部市からの感謝状

地方でしか出せない本がある。

これも郷土学習用資料として、県内の図書館や地域の小中学校に寄贈した。

実は幕末維新期より炭鉱で栄えた私の住む土地は、大正期から活字文化が興隆していた。

地元図書館の郷土資料室には、無名の郷土人たちの膨大な句集や文集、炭鉱関係の本が棚に並んでいる。

当地最大の沖ノ山炭鉱では、創業者の渡邊祐策の没後、事実上の経営を継いだ前出の俵田明が、1936（昭和11）年に渡邊翁記念文化協会を発足させ、翌年にはグラビア情報誌『大宇部』を創刊していたのだ。

戦時統制下に刊行された本誌は、地域住民から評論や随想、創作を募集して誌面に載せたり、炭鉱夫の座談会を開いたり、吉本興業の「わらわし隊」や外国映画の紹介など、意外にも娯楽性の高い誌面を保った。諏訪三郎、山中峯太郎、壷井栄ら著名作家の長編小説や、『新潮』編集者の楢崎勤や、『文藝春秋』編集者の車谷弘など、中央文壇で活躍する文人たちにも書かせていた。

この土地は、言論や活字を軸とする文化事業が産業や経済と両立していたのである。

戦前の沖ノ山炭鉱（俵田家蔵）

例えば、沖ノ山炭鉱から発展した宇部興産が軍需工場となり、大東亜戦争中にナチ・ドイツが考案したロケットエンジンの燃料の一部となる「硫酸」を製造したことで、米軍の攻撃を受けて街が焼失した。それを復興したのも、クラシック音楽だったのだ。俵田明の嗣子・寛夫が宇部好楽協会を立ち上げ、焼け残った渡邊翁記念会館に世界中から著名な音楽家を招いて、瓦礫の中でピアノやバイオリンの演奏会を繰り返した。道路や鉄道、水道管の修復も進めたが、文化振興策との連結は、戦前ドイツのKdF政策の焼き直しの雰囲気さえある。92歳で昨年没した父が、大のクラシック好きだったのも、こうした戦前史と無縁ではなかった。

福岡県の八幡駅前の戦後復興を、村野藤吾を起用し、宇部をモデルにした文化施設を造らせたことは、昔はよく知られていた。その話も前掲の『宇部と俵田三代』で紹介した。

そんな特異な近代史を有する本州最西端の地に、自前の出版社があってもよかろうと開き直りたい。

つぎに計画するのが曾祖母の祖父・青山清の実家である萩の椿八幡宮の社

史だ。

藩都・萩で最も古い部類の神社ゆえ、社史を作ることで新名所になればと、出版を思いついた。

青山清が幕末に招魂祭を主導し、維新後に靖国神社の初代宮司になった話も、弦書房で『靖国の源流』と『靖国誕生』の２冊の本にしてもらっている。

靖国神社を誕生させた青山大宮司家の歴史は古く、ルーツには穴戸（現在の山口県）から白い雉を朝廷に献上し、「白雉」年号を成就させた『日本書紀』に登場する草壁連醜経（クサカベノムラジシコブ）もいる。山口県では、この白雉の捕獲地が顕彰されず、根拠の薄い別の地に石碑が建てられているが、これも言論文化の不在の結果だろう。

グローバリズムに沈む地方を、活字文化で蘇らせたくとも、一人出版社の気合だけではどうにもならない。

各地から人が減り、書店も閉じ始めている時代だ。

紙の本の後退は、文化の衰退であり、文化は地域精神や経済とも連動する。

地方での出版事業は、人々が生きるために必要な道路や鉄道、水道、ガス、電気、空港、港湾などと同じ社会インフラのひとつであったはずだ。自前の言論空間の確立こそが、地方を再興する原動力になる。

地方の版元と書店、そして地方・小出版流通センターのような取次があって、はじめて地方再生も可能となる。

そうであるなら、「地産地消」の出版社バージョンをやるしかない。

戦前のドイツで行われていたHeimatschutzbewegung(郷土保護運動)を活字分野で実現し、それをアウトバーンのように都市部にまでつなげる。そんな操觚界を再建できるか、どうかだろう。

UBE出版で、実験を始めたばかりなのだ。

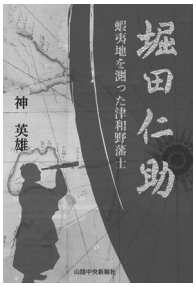
＊

（ほりまさあき／UBE出版代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『堀田仁助 ― 蝦夷地を測った津和野藩士』●神英雄 著



伊能忠敬が日本全国を歩き回って精緻な日本地図を作ったことは世に広く知られています。しかしそれよりも早く蝦夷地まで渡り、東日本太平洋岸と蝦夷地南部の地図を作成した人物がいました。その人物の名は堀田仁助。石見国津和野藩の人でした。15歳で出仕した仁助は次第に算学への関心を強くしていきました。そして主君の参勤交代の際に自費で江戸への随行が許されます。江戸では関流算学の藤田貞資に弟子入りして、算学・暦学・天文学を学びました。その後津和野に戻りましたが、師の藤田の推薦もあり、幕府の天文方に抜擢され再び江戸に出てきます。その後江戸で新しい暦の製作にあたっていた彼にふたたび転機がやってきたのは、48歳のとき。江戸と蝦夷地の航路を明らかにするため、各地で緯度を計測しながら蝦夷地へ赴くことを幕府に命じられたのでした。

仁助は蝦夷地の厚岸の港からの帰路に海路をとるように命じられたにもかかわらず、自らの一存で陸路をとり蝦夷地の南岸を測量しながら松前へと向かい、その結果をもとに幕府に地図を提出しました。忠敬が測量のため蝦夷地へ旅立ったのはそれが完成した翌年です。本書では仁助と忠敬の関係についても一章が割かれていますが、そこからは忠敬が仁助をどう思っていたのかも伝わってきます。日本で初めて現地に赴き測量をして地図を作った人物ながら、今まであまり知られることのなかった堀田仁助の生涯に光を当てます。（副隊長）

◆2000円・四六判・215頁・**山陰中央新報社**・島根・202303刊・ISBN9784879032584

『水と暮らしの信仰 ― 川を巡る民俗文化』●板垣時夫 著

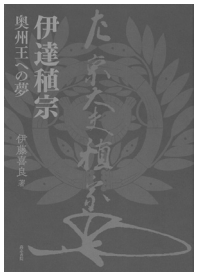
埼玉県東部地域は利根川や江戸川、中川、元荒川など多くの河川と、見沼代用水、葛西用水など多くの用排水路が流れている。水に恵まれた自然環境は、県内有数の穀倉地帯を形成しているが、水の恩恵は反面、水の脅威ともなり、この低地に暮らす人々は洪水など水との闘いの歴史を繰り返してきたのである。

本書では、このような県東部地域の人々の暮らしや民俗を「水との関わり」をキーワードにまとめたもので、水害地域に有形無形に伝えられてきた信仰や伝承が多く拾われている。印象深いものの筆頭に、村人によって巡礼の母娘が濁流に沈められるという人柱伝承があげられる。また、変わったところでは、氾濫から村を守るために泳いで対岸の土手を切りに行き命を失うという土手切り伝承がある。そして、神像や仏像、獅子頭などが洪水の時に流れ着いたとする「漂着神伝承」も数多い。

これら伝承譚のほかに本書ではこの地に多くみられる「水塚」と呼ばれる水防施設のことが紹介されている。水塚とは屋敷地の一隅を土盛りし小高い塚を築いて、塚の上に蔵などが建てられたもののことを言う。ノアの方舟ではないが、これが大水の時に生命や財産を守る緊急避難所となったのである。（N）

◆1200円・A５判・127頁・**埼玉新聞社**・埼玉・202303刊・ISBN9784878895395

『伊達稙宗　奥州王への夢』●伊藤喜良 著



天文17年（1548）、伊達稙宗は息子晴宗との戦に敗れ隠居させられた。稙宗の「奥州王」としての野望はここに潰えたのである。「奥州王」とは何か。そもそも稙宗以前に伊達氏の領国は、福島北部・山形南部・宮城南部の三地域に固定した。奥羽山地によって二つに分断されたこの地は防衛には適しているが、分割統治せざるを得ない状況にあった。それが父子相克の原因となり、伊達家に暗い影を落とす。戦国大名が登場してくる16世紀、その前身が守護や守護代が多い中、国人（国衆）クラスから成り上がった者がいた。伊達氏や毛利氏がその典型であろう。国人（国衆）が乱立する中を一人抜け出して戦国大名として成長する道は極めて険しい。稙宗の場合、大永2年（1522）に陸奥国守護職に補任されたことが戦国大名となる大きな第一歩となった。領国内には10余の郡・荘、約600の郷や村々があり、4～500人ほどの家臣である地頭領主が存在した。かれらの知行地の多くは郷村内に混在した。貨幣経済の浸透により所領が売買され細分化も進んだ。稙宗は棟別銭帳や段銭帳を作成して領国経営の安定化を図り、買地安堵状を通して家臣との主従関係を強化した。子女に恵まれた稙宗は、対外的には養子縁組や婚姻を盛んに行った。総仕上げに息子実元を越後守護上杉氏の養子縁組を進めた矢先、晴宗が反旗を翻し天文の乱が勃発。奥州の地を室町的な身分原理で君臨しようと夢見た稙宗に異議を唱え、動乱の時代へと突き進む。

（I）

◆3500円・A5判・236頁・**高志書院**・東京・202304刊・ISBN9784862152350

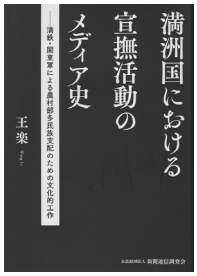
『海を渡った日本文学―「蟹工船」から「雪国」まで』●堀邦維 著

日本文学が西洋人に読まれるためには、日本語で書かれた文章が西洋語（特に英語）に翻訳されなければならないのは当然であるが、日本語と西洋語とは語彙的にも文法的にも余りにも違うので、翻訳者は日本語にかなり精通し、かつ文学的本質を見極める感性や十分な言語能力が必要である。

その優れた翻訳者であり、日本文学研究者としても活躍したエドワード・サイデンステッカーとドナルド・キーンは海外における日本の戦後文学にとって欠かせない存在であるが、二人の日本文学研究の出発点は『源氏物語』であった。古くはイギリスで1925年にその最初の巻が出版されたが、1900年以降に発表された現代作品で最初に翻訳されたのは小林多喜二の『蟹工船』であった。この背景には「軍国日本」という負のイメージを払拭したいという政府の戦略などが絡んでいるのではと著者は分析する。そもそも本書が書かれたきっかけは著者がケンブリッジ大学図書館でユダヤ系知識人について調べていたところ、手に取ったイギリスの月刊誌「エンカウンター」の目次に吉田健一の名を見つけたことだった。吉田健一はキーン著『日本の文学』を批評していた。その経緯を探るうちに、東西冷戦が日本文学の国際化を加速したり、アメリカのクノップフ社の「日本英訳プログラム」で大佛次郎、谷崎潤一郎、川端康成などの小説が海を渡り、川端のノーベル文学賞受賞に至ったと考える。海外からの視点で捉えた新たな日本現代文学史である。（Y）

◆2000円・四六判・237頁・**書肆侃侃房**・福岡・202303刊・ISBN9784863855632

『満洲国における宣撫活動のメディア史―満鉄・関東軍による農村部多民族支配のための文化的工作』●王楽 著



自国であれ他国であれ、国を支配するには、武力にも増して、人の心に働きかける宣伝活動が欠かせない。「宣撫」は中国・唐代の制度で、地方の安定を図るために中央から派遣された宣撫使と呼ばれる高級司令官に発している。統治政策としていかに重要であるかを歴史が証明していると納得させられる。しかも、「宣伝」が戦時、平時を問わずに行われるドメスティックな行為であるのに対して、宣撫は侵略活動の一部であるという。中国に侵出した満鉄と関東軍は、多民族の非識字層が多く暮らす農村部で民心把握と社会再建のため、映画などのメディアを戦略的に用いて宣撫を実行した。女神を供える寺院で1000年以上の歴史がある漢族の民俗行事娘々廟会では、映画、講演会、施療施薬を組み合わせ、北満蒙古族のラマ教廟会では、映画、民族音楽、演劇、講演、絵画、ポスターのほか、小冊子の各頁に連続画を描き迅速にめくると動いて見えるハンドキネマまで使った。映画の娯楽・慰安性と施療施薬の実利性で引き寄せる策は巧妙である。その映画も徐々にプロパガンダに変容していく。

多くの作品を生んだ満州映画のことは、これまでも映画芸術の視点から幾多の書物が出されているが、宣撫への利用を詳らかにするものはなかった。農村部に記録が残されていないため、効果の解明は今後の課題とのことだが、占領下での文化工作の実態と怖さを、メディアの多様性と関連性から実証した労作である。

（飯澤文夫）

◆2000円・四六判・334頁・**新聞通信調査会**・東京・202303刊・ISBN9784907087203

売行良好書

期間：2023年4月15日～5月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『絵本のまにまに』1800円・石風社　(3)『特別報道写真集　大谷翔平２０２２　伝説を超えた二刀流』1300円・岩手日報社　(4)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(5)『文学する中央線沿線』1700円・ぶんしん出版　(6)『日台万華鏡』1600円・書肆侃侃房　(7)『カメラを止めて書きます』2000円・クオン　(8)『野球短歌』1600円・ナナロク社　(9)『ランプシェード』3000円・東京子ども図書館　(10)『棟方志功　装画本の世界』4400円・桂書房　(11)『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』700円・新聞通信調査会　(12)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(13)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『北海道いい旅研究室１９』818円・海豹舎　(2)『伊達稙宗　奥州王への夢』3500円・高志書院　(3)『そらとぶこぎん　第７号』909円・津軽書房　(4)『こぎん誕生』1819円・路上社　(5)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(6)『神たちの食事　供養の時』1500円・あるむ　(7)『見ることに言葉はいるのか』3000円・弘前大学出版会　(8)『おきなわ木の実さんぽ』1800円・ボーダーインク　(9)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社　(10)『現代語訳　上井覚兼日記』1800円・ヒムカ出版　(11)『埼玉の古墳めぐり』1800円・さきたま出版会　(12)『出雲と蘇我王国』2200円・大元出版　(13)『鹿児島県のカミキリムシ』3800円・南方新社　(14)『７８ジジイの「ママチャリで日本縦断」旅日記』1500円・ブックショップ「マイタウン」　(15)『なごや　街と交通の一世紀』8000円・樹林舎　(16)『まぁ映画な、岡山じゃ県２』1600円・蜻文庫

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼2013年７月に刊行された、出版メディアパル刊【昭和の出版が歩んだ道　激動の昭和へＴｉｍｅ　ＴＲａＶＥＬ】（能勢仁・八木壮一共著）が【昭和の出版が歩んだ道　本を創る人々と本を販売する人々の夢と冒険物語 増補版】（ISBN978-4-902251-44-9 本体1800円）となってこの４月にリニューアルされました。本書では新たに「はしがき」が書き改められるとともに「増補版はしがきに添えて…昭和戦後の出版事情と出版流通」が追記され、さらに序章として「昭和の社会・文化史」が、また巻末付録として「出版150年史年表」が加えられています。本書では、第２章「昭和出版今昔物語」中の「地方・小出版流通センターの誕生」において弊社の設立時のことが当時の出版流通事情とともに記述されています。またこの「今昔物語」には、先日閉店した八重洲ブックセンターの出店時のことやネット書店の先駆けといえるブックサービスの「本の宅急便」のことなど興味深いトピックがたくさん掲載されています。旧版刊行後、出版メディアパルからはシリーズ企画として【平成の出版が歩んだ道】（978-4-902251-38-8 本体2,400円）が2020年に、【明治・大正・昭和の出版が歩んだ道】（978-4-902251-43-2 1,800円）が2022年に刊行されています。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。